

過労死防止学会 第5回大会(龍谷大学深草C 2019年5月26日)

特別分科会 森岡孝二研究

特別分科会 まとめ

司会：長井偉訓（愛媛大学名誉教授）

■ 出席人数 8名

■ 報告者氏名・タイトル

高田好章（基礎経済研究所所員）：「森岡孝二先生は、何を語っていたのか」

松浦 章（兵庫県立大学客員研究員）：「森岡孝二の描いた未来」

この「特別分科会」は、研究者としての森岡孝二の一連の研究活動から、過労死防止学会の創立、過労死防止運動や株主オンブズマンとしての社会運動に至るプロセスを明らかにすることが今後の学会活動に寄与できればと、プログラム委員会から提案があり、“特別に”設けられた企画である。

この分科会の主要なテーマは、学会設立にこめられた森岡孝二の理論や思想、そしてそれに裏付けられた社会運動が、どのように相互に絡みながら、彼の理論や思想として結実していったのか、そこで森岡は“何を語っていたのか”、“どのような未来を描いていたのか”、という壮大なものとなった。

報告は、高田会員が基礎研の雑誌『経済科学通信』に、松浦会員が『季論 21』に、森岡孝二の追悼文を寄稿されたということで、報告を依頼することとなった。以下、報告内容に関して簡単な紹介をする。

高田報告は、独占資本主義論の代表的な論客の一人であった森岡孝二が、とくに 1980 年代後半から過労死防止運動や株主オンブズマンの社会運動家として活躍するようになった経緯を、森岡の代表的な経済学の理論書 6 冊を時系列に解説することによって明らかにする試みであった。

森岡が過労死防止運動に強く関わっていった背景には、彼自身の研究活動とそれに関わる個人的な経験や大阪過労死問題連絡会等との係わりがある。研究活動面では、当時の経済理論学会における独占資本主義論の方法論争に対する疑問と批判。個人的経験では、2 度に及ぶ心臓弁膜症での入院・手術体験を通して、日本人の働き過ぎと健康問題に強い関心を抱いたこと。

一方、1990 年代後半から森岡は、企業監視の市民団体である株主オンブズマンの結成に加わり、株主総会等の改革を求める企業改革論にも強い関心を持ち始めていた。そして森岡の遺作となった『雇用身分社会の出現と労働時間-過労死を生む現代日本の病巣』（桜井書店、2019 年 2 月）は、マルクスの労働時間論がマルクス経済学において軽視されてきた日本的労資関係や方法論的限界を指摘すると共に、過労死防止を目指す過労死弁護団と「過労死を考える家族の会」の新しい社会運動が生み出した重要な成果が過労死防止法であったと、その社会的意義を高く評価している。

松浦報告は、松浦が当時所属していた大阪損保革新懇が主催する雇用・労働問題の講演会に森岡を講師として招聘した時から最近まで、松浦が森岡から受けた学問的な刺激を中心に展開すると共に、森岡孝二の人間像、すなわち“森岡孝二とはどのような人間であったのか”を描き出している。松浦によれば、森岡は経済理論家として優れていただけでなく、職場で苦悩する労働者や過労死で大事な家族を亡くされた遺族に思いをはせながら、労働基準法に基づく労働時間規制の実効性を高めていく民主的規制や運動を重視していた。なぜならば、森岡は労働時間の社会的規制の意義を、なによりも労働者の人間としての「尊厳の保持」と「発達場の確保」にあり、労基法における「人たるに値する生活」も長時間労働が人間的尊厳と発達を損なうなら保証されようがないと、強く認識していたからである。そして、森岡の凄さは、それを机上の空論とすることなく、過労死家族の会の人々に寄り添いながら、過労死防止を求める法曹関係者、ジャーナリスト、研究者、労働組合活動家などと連携しながら、過労死防止法や学会の創立に死力を尽くしてきたところにあった。松浦は、そこに森岡孝二という人間の真骨頂を見ている。そして、終わりにで、私たちが“森岡孝二から引き継ぐもの”は、科学的分析に基づく理論を発展させていくだけでなく、絶えず現場の労働者に寄り添いながら、それを実践のテーブルに乗せてゆく「気概」であると締めくくっている。

最後に、司会者の感想・コメントを記しておこう。参加者が8名と少なかったということもあり、フロアからの提案でラウンドテーブル方式により行われた。報告者にそれぞれ30分程ご報告を頂いた後、全体討論に入った。司会者として、テーマがあまりにも壮大なために議論があまり拡散しないように、“森岡孝二が描いた未来～私たちは何を引継ぎか”という視点から、「森岡孝二が描いた未来はどのような社会か」、「私たちは何を引継ぐのか」という2つの論点を予め提示しておいた。しかし、司会者の時間管理の拙さもあり、肝心な論点を深めることが出来なかったことを反省している。

以下、誤解を恐れずに言えば、森岡孝二が描いた“未来の日本社会”とは、ユートピア的な社会主義・共産主義社会でもなかったし、もちろん「市場個人主義」を強力な政策的イデオロギーとする現代資本主義、すなわち「強欲資本主義」（森岡、2010）でもなかった。森岡が目指したのは、株主オンブズマンなどの株主による企業の民主的規制と過労死防止を求める「新たな社会運動」による“本来の市民社会”の実現であった。

文責：長井偉訓